

叛旗

共産主義者同盟

6月1日
第112号 100円

発行所/蒼民社
編集人 仲代真理 発行人 川崎文人
東京都新宿区百人町1-11-31 芦原ビル内(郵便番号160) 電話03(362)0149 振替東京1-162856番
(宛先著) 著民社 関西著民社 電話06(312)8263

定期購読 開封1年 2,700円 密封1年 3,300円(代共)

若疑シク覺候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

6・18

三上個人集会に異議アリ!

70年代後期

政治思想の切実な課題

憲法的政治と政治思想過程の根
據的な問題は、個人と個人の対立、そこへへびり
腹のアタックの裡に存在している。我々は「否」
を離れて、単独者の必

単独表現者(?)と内ゲバ

75年の秋、党員会議者上治の離脱
を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「叛旗」の離脱は、個人と個人の対立、そこへへびり
腹のアタックの裡に存在している。我々は「否」
を離れて、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「叛旗」の離脱は、個人と個人の対立、そこへへびり
腹のアタックの裡に存在している。我々は「否」
を離れて、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

情況への突入の受継ぐ、そしての現存者が個々の主

体の政治思想の創出を、如何なる必然と不可避免な関

係としてとらえているのかであり、更に、情説的な

政治の構成を、社会の現実関係との対応から、如何に

全人類の構成軸へ繋りこなすのがある。70

年代の透明化、最後の党派など、なれば、最

良の党派としての試行錯誤を経て、認めた我が

「叛旗」派も、75年の秋、党員会議者上治の離脱

を産み出した。残念なことである。三上のその後の
立論が、中央委員会の審査による問題提起出し、更
なる曲折を経ながらも、ついには、「共同性から離
れる」、「中間組織(叛旗派)」を解体せよ、そして
言外に自らの想定する「最後の党派 最良の党
派」を創設せんとの内容に移行しつつある。見えて
いる。我々は三上が、「叛旗」を離れ、単独者の必

要と單独者の関係というよりは、それを回避した
かに付ける。そこで、その間に何が起きたのか
を明確にする。

6・15から6・18集会に注目せよ。

「時々の現象」

叛旗の本性はその根柢で、多数

大衆の生活水準に、戦後の知的現存性の発揚を

不能としているものである。政治の固有の領域

で問われている最大の課題は、ます、新たな時代、

<div data-bbox="2210 216 2220 343" data-label

